

最近における殷式遺蹟の研究と発掘（下）

伊 藤 道 治

三

さて、この項では墓葬について述べよう。先に殷代の地下建築にふれた際に除外した墓と坑とがこれに当る。墓は人間を埋葬したもの、坑は人間以外に車馬を共に埋葬したものと、馬・牛・羊・狗・猪・鳥など、或は牛・羊・羊狗を共に埋葬したものである。このうち坑は独立して埋葬されることはなく、墓或は地上の建築に附随して行われたと考えられる。即ち祭祀の犠牲、或は殉葬として行われたのである。従つて墓葬の中心は石氏の所謂墓にあるわけであるが、今少しく詳しく分類したものを紹介しよう。¹⁹⁾

- 1、単仰 長方形、南北向と東西向とあり、一人を伸展仰置、随葬品あるものとなきものと二種あり。（図14の4）
- 2、単俯 長方形、南北向或は東北向、一人を伸展俯置、随葬品をとみなうものは陶甗・陶尊など、稀に銅戈などあり。
- 3、多俯 長方形、南北向が多く、三人を埋めたものと五人との

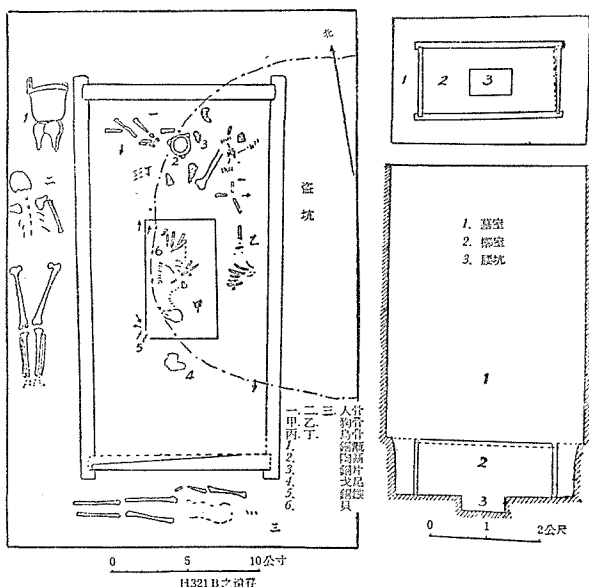
腰坑あるものとなきものとあり。（図14の6）

ものが多い。俯身で、頭部を切断した後に軀幹と共に埋葬す。（図14の3・5・7）

- 4、乱置 不規則な長方形、人架数は一定せず、埋葬の状態も仰・俯・側・屈身などあり、方向も不規則、頭部を切断した後には埋葬、時に頭骨のみ一ヶ所に集めたものがある。随葬物はないが、身辺に数個の蚌飾・銅鈴などの発見されるものあり。（図14の1・2）

- 5、跪葬 方形、跪座した一人を埋める。随葬物のあるものは、右手に戈をもつものと、右手に戈、左手に盾の二つをもつものがある。また時に狗を一匹伴うものあり。顔面はその墓の位置によつて南向と北向とあり。（図14の9）
- 6、童葬 長方形、数人の子供を埋葬。随葬物なきものと、松緑石や牙飾の発見されるものがある。（図14の10）
- 7、獸葬 長方形、南北向と東西向とあり。牛・羊・狗などを埋葬。

さてこの小屯地区における墓葬について見ると、石氏の行つた研究は、図13（前号）の如き配置のもので、これらはすべて乙七基址に対して行われたものであるという。乙七基址の内部にある墓葬は三層に分れ、下層は三ヶの狗墓、中層は跪墓一と獸葬墓九、上層は跪墓四と多俯墓三から成立つている。このうち下層は奠墓、中層は豎柱と夫々の建築の過程で行われた祭祀の犠牲であり、上層の跪墓



第15図中型墓（第10形式）の一例
（『河南安陽後岡的殷墓』）

は門戸に当り、警衛者を埋め、他の三墓のうち二つは女人葬かとも考えられ、一つは厨刀形の銅刀を出土しているので膳夫と考えられている。即ち近侍者を埋めたのである。これらは武官村大墓の腰坑・陪葬（女性と考えられる陪葬者もある）・墓道の跪墓に当るものであろう。従つて石氏の奠墓などの犠牲という解釈の可否は別として、この基址と大墓との間には同じような現象が見られるのである。更に基址の南部の排列の正しい墓葬は北・中・南の三組に分けられる。北組には五ヶの車馬坑（M二〇・四〇・四五・二二・二〇四）を中心として、西側に多俯墓に属する三人墓・五人墓が並び、その他童墓・銅器墓などが東側にある。中組は西端にあるM一六四の騎馬坑（一人一馬一狗）を主として多数の多俯・乱置墓が並んでいる。石氏は此等の現象を解釈して、南組の一墓（10形式・M二三）を総指揮官とし、北組は戦車五輛を中心とした車隊（指揮官はM二〇か）であり、中組は騎馬墓（M一六四）を将とした歩兵の集団であり、これら墓葬者の靈魂は乙七基址を悪鬼から保護する目的であるとした。氏は更に中組には四十一の墓葬を失はれたものとして補充し、表の如き軍団組織を考へるのである。

今これを西北岡について考えると、東区から一車坑が発掘され、二十五の車が出土した^①、後岡大墓の北墓道には一車坑があつた^②（図16）また武官村大墓には北墓道に品字形に並んだ三馬坑計十六匹

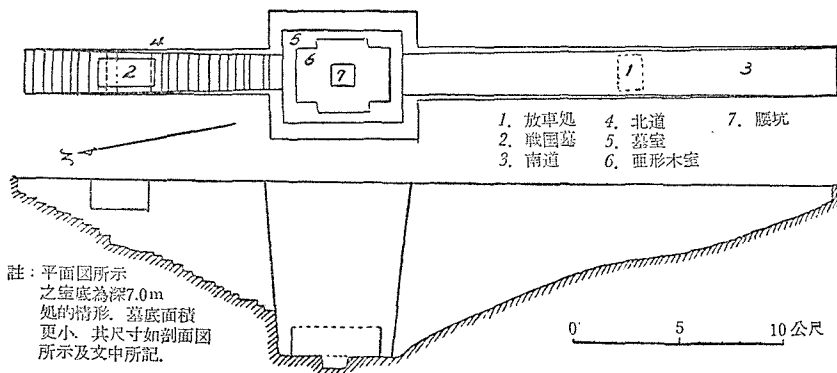
別類		目別		股代地		下現		象	
車	火車隊	小屯五車一隊							
	車綱	西北岡：一坑有二十五輜車							
部	甲士	小屯：每車三人各一套兵器							
	隨車步卒	小屯一百二十六人（内一人為全部首長）							
部	前拒	小屯車前橫列二十五人							
	炊子	小屯：跪負銅器墓二人							
部	衣裝	小屯：童葬十一人							
	廐養	小屯：跪葬一人							
部	樵汲	小屯：器墓十二人							
	軍	「五師為軍」							
步	師	「五旅為師」							
	旅長	小屯：現存三百七十八人復原六百二十六人							
部	卒長	第一級一人騎馬							
	兩司馬	第二級現存三人着銅鈴額帶							
部	伍長	第三級二十人着蚌飾額帶							
	步兵	第四級約百人骨上塗紅							
		第五級現存二百五十四具復原可能為五百人白骨脩身							

石璋如「周代兵制探源」（大陸雜誌第九卷第九期）

の馬葬があり、四馬一車として四ヶの戦車に相当する。また中組は武官村大墓の多数の排葬坑・乱葬坑といわれる多俯・乱置墓に相当すると考えられれば面白い。即ちこの点でも、大墓と同様な性格が考えられるのである。先の建築の頂で引用した董作賓氏の言葉はこ

のような現象の類似から結論されたものである。然しこのような点に關しては、すでに書いたので、今はふれない。ただ圖13について今少しく説明を加えると、乙・丙組基址では東西に長い基址（乙七・乙十一など）は正房、南北に長いもの（乙十二）は扁房であるといわれ、基址内に行われた狗墓・獸葬墓・跪墓などの見られるのは正房のみであり、乙十一・十二などの下面にある墓葬は地層關係から明らかに乙十一・十二などと關係なく、中組の西半にあるものと同層と考えられる。従つて石氏はこれをすべて乙七に關係せしめたわけである。然し若しこのように乙十一などの基址と明瞭に區別し得るものであるならば、他の四十一墓が失はれて了つたとするのも理解し難く、ひいてはその復原も肯定し得ないように考えられるから、石氏の表の如き軍団編成も、多少疑問を懷かざるを得ないが、その当否は別としても、墓葬・建築ともに、石氏のような研究が積み重ねられて行けば、或は將來もつと明らかな殷虚の概観が得られるであろう。この点、大いに石氏の研究を期待する次第である。

次に屢々引例した大墓について次にのべよう。すでに梅原教授などによつて西北岡大墓の大意が紹介され、また後岡・武官村の大墓については発掘報告・或は紹介が行われているからここではふれない。安陽地区からは總計十二の大墓（西北岡十一・後岡一）が発見されたが、何れも南北向で、南と北或は東西南北四方に墓道を作



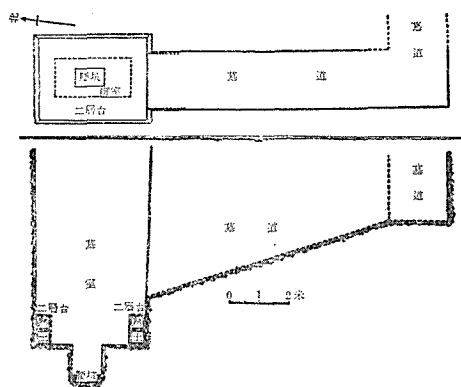
第16図 殷代の大墓 (「河南安陽後岡的殷墓」)

大墓は、殷墟以外には
濬県と輝県とから発掘
された。濬県のものは
西周初期と推定される
もの一を含めて、計六
墓あり、何れも腰坑は
なく、西周以降のもの
である。^⑧ 輝県の大墓
(一五〇号墓)は、南
墓道長一四・八、寛三
米、北墓道は寛一・二
米で長さは不明である
が、階段状をなしてい
る。墓室は長七・四、
寛五・二、深さは八・
二米あり、腰坑と二層
台とがある。腰坑には
俯身の人骨と狗骨とが
あり、二層台上に合計

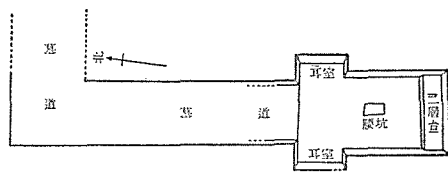
四人の俯身人骨があつたほか、南面の二層台の土中などに人頭骨五個が発見された。この構造。大きさは後岡の大墓と殆んど同様で、^⑭図16の如くである（これは後岡大墓である、輝県大墓の実測図は載せられていない）。その附近には殉葬者を埋めた多俯・乱置墓が発見されなかつたのも後岡と同様であり、周永珍氏はこの二墓が、西北岡に比して小なることによるかといっているが、^⑮或は時代か、埋葬された主人のちがいかもかもしれない。輝県の発掘報告によると、この大墓は、安陽小屯より多少時代が遅れるかもしれない。

従来が発掘では、西北岡の仮大墓には墓道がなく、また埋葬の行われた形跡も余りないので、これを除外すれば、大墓はすべて二或は四の墓道をもつ。これに対して先の分類の10形式では図15の如き形式が普通であつた。鄴州などのものもこれに当る。然るに一九五二年秋の洛陽東郊掘路口区の発掘では図17・18の如きものが発見され、また同じ東大寺区からも、長三・八七米、寛二・六七米、深七・八米で、南面に墓道があり、墓道は中途でやはり東に向つて折れていたのである。墓室の二層台上の東と北とに殉葬架が、^⑯発見され、また腰坑も作られている。この墓室の大きさの墓は、従来墓道をもつものは発見されなかつたので、これは洛陽の殷墓（或は西周墓）のもつ性格の一つということが出来る。この洛陽東郊からは甲骨の所で述べた如く、最も進んだ形式の甲骨を出土し、また

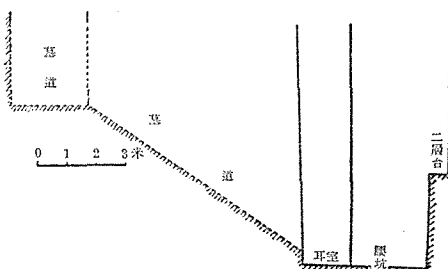
この墓の報告者も、武王滅殷後の殷の遺民のものかと言っている。即ち洛陽に移住させられた殷民たちである。若しこのような仮定が許されるとするならば、或は中型墓とも言うべき10形式に大墓の墓道が作られ、大墓と中型墓との混合した形になったのかもしれない。ただこの洛陽の墓を殷の遺民のものとするに對しては、批判があり、殷文化の分佈から考えると、武王滅殷以前にすでに殷の文化がこの地方に及んでをり、その遺蹟であることも可能であり、また出土の遺物に見られる西周的要素も、単に時代差とする以外に、地



第17図 洛陽東郊殷墓
(「1952年秋季洛陽東郊発掘報告」)



第18図 洛陽東郊殷墓
(「1952年秋季洛陽東郊発掘報告」)



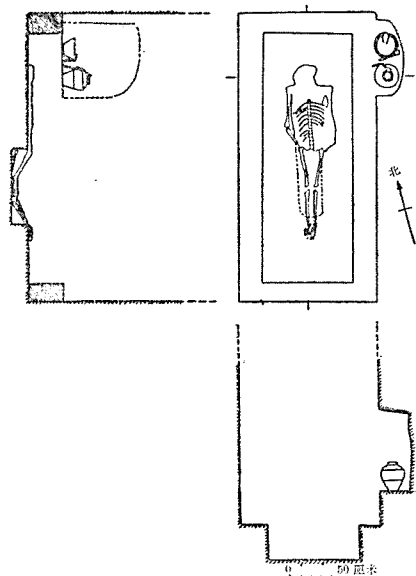
方差とも考えられる。

今一つこの洛陽の墓で注意すべきことは、図18の第一号墓の如く耳室をもつた墓室が発見されたことである。これは大司空村の殷墓(図19)に随葬品をいれる壁龕をつくつたものが発見されたことと共に新しい発見であり、戦国墓に通ずる形式であることは将来の墓制の研究に新しい興味を加えたものである。^⑤

最後に一、二気付いた点にふれる。殷或は西周初期の殷式墓葬地区に広く見られた、腰坑について見ると、安陽地区をはじめ、鄭州東北の白家莊・人民公園・洛陽東郊・長安斗門鎮などの殷・西周墓に見られた形式であるが^⑥、一九五五年に行われた鄭州人民公園の西方碧沙崗の発掘では、一四五墓中十例の腰坑をともなつた春秋戦国早期と推定される墓葬が発見された。^⑦これは前の壁龕墓、或は器形は戦国式でありながら、文字は殷式の文字をもつた河南省鄭県出土の東周初期の銅器と共に将来の殷文化の流転と東周との關係をたどる

手掛りになるのであろう。

第二は俯身葬である。これは早く李濟氏によつて注目され、殷代に特有の形式の一つと考えられて来た。殷墟の俯身葬は、陶器・銅器を随葬品として併うものがあり、第三次発掘の一八・四号墓では銅爵・銅觚・陶鬲・陶甗などが発見され、その歯骨には切歯が行われていたことが明らかにされている。殷墟以外では山東日照県の龍山期の墓に数例あり、陶器の随葬が見られたが、一九五五年七月の第二次長安半坡村の彩陶遺址の発掘では、やはり俯身葬が発見され（墓数は未報告）、これには全く随葬品が見られなかった。この半坡村の彩陶遺蹟の時代が確定すれば、この葬法が新石器時代から殷



第19図 大司空村壁龕墓
（「1953年安陽大司空村発掘報告」）

代にまで普遍的なものであつたか否かが明らかになるかもしれない。殷代の俯身葬については、王仲殊氏は日照県の龍山文化の影響かと推定しているが、現在の所確定したことは言い得ない。ただ従来殷の俯身葬の時期が余り明らかでなかったのが、輝県の発掘によつて可成り明らかになったことは注意しなければならない。輝県琉璃閣区の墓葬は北・中・南の三小区に分けられるが、北区二十八墓中、俯身葬は十二墓あり、且つ仰身墓十六のうちの二（二二六号）が、墓向が南北で、頭が北を向く以外は、すべて墓向は東西で、頭は東向であつた。中区は九墓中、二三七号墓が頭を東にした俯身葬である以外、他はすべて仰身で南を向いていた。而かも墓の大きさは両区とも小型墓のみであつた。これに対して南区には大・中・小の三型十六墓あり、すべて頭は北向であつたが、俯身葬は三墓のみであつたのである（殉葬者を除く）。これを出土の遺物について見ると、北中区は鄭州の早期に相当するといわれ、従つて小屯期以前に俯身葬が多かつたことが明らかにされた。南区は鄭州晩期即ち小屯期に相当する。俯身葬の時代が早いことはすでに李濟氏によつて考えられていたのであるが、この輝県の掘発によつて一層確実なものとなつた。

また墓向について見ると、頭部が東向から南向・北向に変化していることも、小屯が殆んど北向であることと共に殷代とその前後の

葬法とを考ふる参考になるし、更に大墓・中型墓などの殉葬者が多くは俯身であることは、それが中国の學者によつて奴隸といわれることの可否は別として、比較的早期とされる独立の俯身葬とどのような關係があるのか、今後の問題である。また殉葬者が往々兩腕を背でくくりあはせた如く交叉されていることは、四盤磨地区で發見された小屯期より早い（卜骨から見て鄭州中期に當る）墓葬で、兒童を俯身屈肢で手を背面で交叉させたことと關係があるかもしれないし、更にこの四盤磨の風習は鄭州の基址において、先号にふれた如く、夯土の下面に兒童を埋葬していたことと關係あるかもしれない、即ち子供に対して特殊な宗教的な觀念があつたのかもしれないが、何れも今後の問題である。

第三は墓葬に見られる含貝掘貝と言われる風習である。これは子安貝一・二枚を死者の口中或は手中にに入れて葬る風習である。この風習は、貝を生命力或は生殖力の象徵と見なし、死者の靈魂の長生を願つたものかとも考えられる。周永珍氏はこれを股代墓葬に普通の風習であるというが、これは誤りである。この風習が發掘者達に注意されたのは、西北岡墓葬地区の發掘よりも後、第十四次の大司空村發掘に至つてはじめて注目され、その後の小屯の發掘でも七墓に見られたのみで、これから考えると、ごく小數しか發見されなかつたのであり、また西北岡の三回の發掘では一二二八の小墓が發掘

されたのであるから、もしこの風習が股代に普遍的であるならば、当然注意された筈であつた。然るに一九五三年の大司空村發掘では一六五墓中半数の八三墓から、貝が發見された。従つてこの含貝掘貝の風習は、大司空村地域の股代人に広く行われたものである。故にこの風習は小屯地区とは、時代的な差であるか、或は居住者の習慣の差によるものと考えられる。このことは同じ安陽地区でも四盤磨村の墓葬には、小屯とは多少異つた要素があると思われることと併せ考えると、鄭州晚期に相當する安陽の股代遺蹟も、その構成要素には色々のものがあり、また當時の股の都を形づくつていたものの間には種々の異習をもつた人々が参加していたことを想像せしめる。この点でも、鄭州の股代遺蹟が精密に發掘され、また早・中・晩の三期の相互の關係が明らかにされる必要を感じる。

結 語

以上の如く、三つの点にわけて述べて来たけれども、最後にこれらをまとめてみよう。

一、亀甲を卜占に使用する風習は、股式遺蹟の中期にはじまり、晚期に盛んになる。鄭州では、亀甲と青銅器とは、共にこの中期からはじまるので、或は両者は關聯してその起源を考えられる可きかもしれない。

二、小屯では、白灰面を居住址に利用しなかつた。従つてこの漆

陰面ともいう可きものに代る方法が用いられたかもしれない。この点で、小屯以前と小屯以後とは、居住址の建設に変化があり、小屯はそれ以後に関係が深いとも想像される。

三、或る種の墓葬と居住址のあるものとは同じような観念のもとに作られていたことは、当時の宗教観念を考える一つの手掛りを与えるであらう。特に幼児の殉葬はその特色である。

四、殷代に特有といわれた俯身葬は、時期的には早期に盛行したと思はれる。従つて殷文化の早期と龍山期文化との關聯を考える一つの道をなしていると考えられる。

五、墓葬の形式のあるものは、東周時代にも影響を残していることは、殷文化の流転を考えるに参考になるであらう。

これらの特色は、今後の古代史研究に重要な鍵となるであらう。それと共に屢々繰返すようであるが、今後の発掘には遺蹟全体を明確に把握するような方法がとられることを希望して本稿を終る。なお本稿は私の殷代研究のためのノートであつたために、まとまりのないものになつて了つたことを深くお詫びする。

附 論

本稿を書き終えた後になつて気付いた研究或は新着の報告を見ることが出来たので、一二補足しておく。

1、甲骨について

輝県琉璃閣区において出土した卜骨は、前号において述べた如く、早期或は中期、特に早期のものが多くようであるが、このほか第一坑からは亀版をも一ヶ出土しているが、これは卜占に使用したものではない。琉璃閣区の殷代灰坑は四所あり、そのうち三所は中区にあり、第四坑一所が南区である。この四坑のうち卜骨を出土したのは第一坑が十七片、第二坑が二片、第四坑が一片である。但し第四坑は時期的には晩期の墓葬より下層のものであり、卜骨の処理方法は早期のものであつた。このうち最も重要なのは第一坑である。この灰坑は深さ十一米以上あり、十六以上の堆積層より成つていて、卜骨の出土するのは、第三層から第七層まで、即ち大体地下五米以上の層から出土している。そうしてこの五米を中間とする上層と下層との間には比較的長い時期の間隔があるといわれる。然し出土の遺物ではやはり共に殷代早期のものといわれる。従つて、ただ一例ではあるが、この坑の地層關係から、卜骨の習慣が殷文化に入つて来たのは、早期のうちの後半ということが可能になるかもしれない。このほか西方の褚邱区からも卜骨を出土しているが、これは早期のものである^⑩。

ここで問題になるのは、黒陶文化の卜骨と、殷文化の卜骨との關係である。前号ですてに見た如く、卜骨と卜骨とは別個のものと考へたのであるが、石璋如氏も同様の考えを發表している。石氏は中

国新石器時代の文化を、彩陶・灰陶・黒陶の三種にわけるのであるが、^⑨ト骨は前号にあげた大賚店・城子崖・羊頭窪などのはか、安陽地区の後岡・高井台子・同楽塞の黒陶期の遺蹟からも出土したことをあげ、何れもその方法は原始的であるとする。これに対して滕県安上村・永城県黒孤堆のト亀が共に裏面に鑿を併い、而かも灰陶に關係あるとするのである。而かも考古学的な研究によれば、この三つの文化は時代的には彩陶・黒陶・灰陶の順に考えられ、小屯地区では灰陶に代表される殷文化に亀甲が発見されるので、石氏はト骨を併う黒陶の上に、灰陶とト亀とを併う文化が来り、この兩者によって殷文化が成立すると考えるのである。^⑩従つて淮河流域の灰陶文化が殷文化と重要な關係をもつことになるのであるが、既に見た如く、亀甲は西方とも多少關係があり、また殷式早期がト骨のみを出土していることは、どのように考えられ、またト骨以前の殷式文化があるとすれば、この三つの關係を如何に考えたらいいか将来重要な問題になるであらう。

2、青銅器について

先の結論の部で述べた如く、青銅器は鄭州中期のト亀の出現と同時に考えられると推定したのであるが、現在までの所鄭州では確かにそうであつた。二里岡の中期の遺蹟では、銅鍬とト骨に鍬を作るのに使用したと考えられる銅鍬を出土したのみであつたが、鄭州市

の東北白家莊の中期の(或は早期にも近いと思はれる)墓葬では、第二号墓から爵・罍・盤・斝・鼎各一器、第三号墓は鼎三・罍・觚各二・罍・爵・簋各一を出土した。^⑪これらの青銅器と同じ形制の銅器が輝県の墓からも出土している。銅鍬などの小さいものは除き、中区の一〇号墓からは鬲・罍・罍・觚・戈各一、その他北・南両区からも銅容器を出土している。^⑫墓葬の所で述べた如く、北・中区は早期に、南区は晩期に属するが、従つて、殷早期から銅器の使用が行われているのであり、鄭州よりも早くなるのである。またこれら鄭州・輝県の銅器は小屯C区のM三三三墓などから出土したものと最も關係が深い。この小屯C区についてはすでにのべた如く、殷墟のうちでも第一期或はそれに近い時期の遺蹟と考えられるものが多く、即ち小屯遺蹟でも比較的早い時期からC区が使用されていたことが、銅器の面からも証明されると考えられる。従来編年の困難であつた殷の青銅器も、将来次第に編年が可能になるかもしれない。

然し青銅器の源流ということになると、殷代早期からすでに出現しているので、その起原はやはり依然として不明といわざるを得ない。(本研究は昭和三十年度文部省科学研究費によるものである)

^⑨ 石璋如「殷墟最近之重要發現」、同「小屯C区的墓葬群」(中央研究院歷史語言研究所集刊第二十三本)の兩者にのせられた分類を総合したものである。図14は後者に所載。

④⑩ 中国科学院考古研究所中国田野考古報告集第一号「輝県発掘報告」

④① 石璋如「殷墟最近之重要發現」挿図九。なお建築の祭儀については、石氏の「同統篇」（中国考古学報第四冊）に詳しい。

④② 郭宝鈞「一九五〇年春殷墟発掘報告」、岡田芳三郎「武官村の殷代大墓」（史林三七卷五号）

④③ M二〇は一車四馬三人、他は一車二馬三人から成つていた。

④④ 石氏「小屯C区的葬墓群」に引用されている。

④⑤ 石璋如「河南安陽後岡的殷墓」（中央研究院歷史語言研究所集刊第十三本）

④⑥ 註⑨

④⑦ 石璋如「殷墟最近之重要發現」頁三〇以下

④⑧ 註④⑦ 石氏は同頁三十一においては、中組などの墓葬は扁房に関係するかも考えていたようである。

④⑨ 石氏は「殷墟最近重要發現」、「同統篇」などでは、これらの墓葬は、卜辞の伐祭、即ち人間の首を斬つて犠牲として供えるものと考えていた。然し若しこれによつて軍団編成を考えるとすれば、伐祭として考へることは多少変更を要する。以下に石氏の前説を挙げて参考に供しよう。乙七基址内部の墓葬のうち、上層にある四ケの跪墓は、門戸の部分にあり、戈・盾などを所持して警護の任にあたつたのであるが、これは周礼天官の閼人に相当し、「王宮每門四人、圜游亦如之」、「閼人掌守王宮之中門之禁、喪服凶器不入宮、濯服賊器不入宮、奇服怪民不入宮、凡内人公器賓客無帥、則幾其出入、以時啓閉、凡外内命夫命婦出入、則為之闔、掌掃門庭、大祭祀喪紀之事、設門燎、蹕宮門

廟門、凡賓客亦如之」と言われるものであるとする。また女人葬と考えられる二墓については、合計五人の人物が発見されているので、これも同じく天官の寺人に相当し、「王之正内五人」「寺人掌王之内人、及女官之戒令、相道其出入之事而糾之、若有喪紀賓客祭祀之事、則帥女官而致於有司、佐世婦治礼事、掌内人之禁令、凡内人弔臨于外、則帥而往立于其前、而詔相之」を職掌とするものに当てたわけである。また北・中・南三区のうち、北区については、これら墓葬は前後五回にわたつて行われた祭祀の犠牲を埋めたものであるとし中・南区の墓葬には、資料の未整理のために言及しなかつた。勿論これらの考もつの一え推定ではあるが、「C区墓葬群」では何もふれていないのは何故であろうか。若し石氏が後になつて北・中南区の墓葬を軍隊組織として考えたのが正しいとするならば、大半のものが頭部を切断されていたことをどのように考えるべきか、閼人にあたる墓葬などの人骨が完全なものであり、また車馬坑・騎馬坑などのものも俯身ではあるが、やはり完全であつた。單に階級の上下のみによつても解決しえないようであり、簡単に軍隊組織を考へることも危険のようである。

⑤⑩ 梅原末治「河南省彰德府外侯家莊古墓群の概観」一（宝雲第二十九号）

⑤① 武官村大墓は西北岡に連続したものであるから、これに加えて西北岡として一括する。西北岡は従来侯家莊西北岡と称されて来たが、實際は武官村の西北岡なのである。なお梅原教授はこの十一のほか、更に無号大墓一をあげられているが、詳細は判明しない。陳夢家「殷代銅器」（考古学報第七冊）、胡厚宣

「殷墟発掘」は何れもこの無号墓についてはふれていない。

⑤2 郭宝鈞「潁県辛村古残墓之清理」(田野考古報告第一冊)

⑤3 「潁県発掘報告」頁十六、他の大墓にも同様の現象がある。

⑤4 周永珍「殷代墓葬形制」(通訊五五年第六期)

⑤5 「潁県発掘報告」頁三十一。なお潁県固圉村区で発掘された三つの戦国大墓の形制は潁県と同形式である。また琉璃閣区の戦国墓一四〇号は櫛と墓壁との間に炭と石とを積み重ねているが、これは洛陽東郊の殷末周初と考えられる第一号墓(図18)がやはり櫛外に石を積んでいるのと同様である。

⑤6 郭宝鈞等前掲書

⑤7 胡謙盈「關於殷人墓的商確」(通訊五六年第三期)

⑤8 註⑤5及本稿下頁六八

⑤9 河南文物工作隊第一隊「鄭州市白家莊商代墓葬發掘簡報」

(文參五五年第十期)、鄭州市文物工作組「鄭州市人民公園第二十五号商代墓葬清理簡報」(文參五四年第十二期)、石興邦「長安普渡村西周墓葬發掘記」(考古學報第八冊)

⑥0 河南省文化局文物工作隊第一隊「鄭州碧沙崗發掘簡報」(文參五六年第三期)、この春秋戦国早期といわれる墓は、腰坑の形が不規則で、殷代のものが長方形をしているのに比べ、崩れた形である。従つて腰坑を併う墓制は殷以後されたものと考えられ、腰坑に与えられていた宗教的意義も次第に忘れられていったのであろう。

⑥1 唐蘭「郊県出土的銅器群」(文參五四年第五期)

⑥2 李濟「俯身葬」(安陽発掘報告第三期)

⑥3 考古研究所西安半坡工作隊「西安半坡遺址第二次発掘的主要

收穫」(通訊五六年第二期)

⑥4 梁思永「龍山文化——中國文明的史前期之一」(考古學報第七冊)、王仲殊「墓葬略説」(通訊五五年第一期)

⑥5 「潁県発掘報告」頁二六・三十一

⑥6 郭宝鈞「一九五〇年春殷墟発掘報告」

⑥7 前号頁五九

⑥8 周永珍前掲書

⑥9 高去尋「殷礼的含具掘具」(中央研究院院刊一)、この風習は後に玉・銅銭を使用する。

⑦0 附論2

⑦1 「潁県発掘報告」第一編琉璃閣区・第四篇楮邱区。

⑦2 石璋如「新石器時代的中原」(大陸雜誌第四卷三期)

⑦3 石璋如「骨卜与亀卜探源」(大陸雜誌第八卷九期)

⑦4 安志敏「一九五二年秋季鄭州二里岡発掘記」

⑦5 註⑤9

⑦6 「潁県発掘報告」頁二七、同報告によると北・中区の銅器は、小屯前期に当り、南区は小屯期に相当するといふ。従つて小屯C区の遺蹟は、武丁からはじまる卜辞より早いかもしれない。また胡厚宣氏は、陳夢家氏の第一期武丁時代後半という自組・子組(筆者らの王族・多子族)卜辞を、武丁以前かとも推定している。(戦後京津新獲甲骨集)序)これらの卜辞もまた第一にC区から出土している。

⑦7 前号頁五五以下、また建築に見られる自灰面が、新石器時代に普遍的であり、これが小屯ではC区にただ一例しか見られなかつたことも、時期上の早晚と関係あるとも考えられる。